

宮尾登美子

鬼龍院花子の生涯



中公文庫



中公文庫

きりゆういんはなこ しょうがい
鬼龍院花子の生涯

定価はカバーに表示してあります。

1998年1月6日印刷

1998年1月18日発行

著者 みやおとみこ
宮尾登美子

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Tomiko Miyao

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203034-X C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

鬼龍院花子の生涯

中央公論社

鬼龍院花子の生涯

第一章

浦戸湾の水を引いた掘割は、海岸通り、稻荷町、農人町の岸をうるおしながら高知の市街地に入り、四つ橋で分れて一方は新京橋の盛り場へ、一方は納屋堀の行きどまりに落着く。

三方を道路にかこまれた納屋堀は満潮時には道すれすれまで水が満ち、そこにもやっている大小の漁船を高く高く、威勢よく持上げてみせる。市街地のなかに満艦飾の漁船が並ぶのは、この岸のまわりに古くから大小の魚市場が並んでいるためで、それにもう一つ、^{かいわい}界限に風情を添えているものに樹齡千年といわれる樟の大樹がある。樟は、江戸末期、高知城下最大の私塾といわれた^{えいしんがくしや}盈進学舎のなかに育ったもので、その後学制整ってここが市立第一小学校となった大正のいまでも、赤い煉瓦^{れんが}の塀のなかで年々眩^{まぶ}しいほどの若葉をつけ、大空に向かって伸び続けている。魚市場があるため町の空気は漁師町のように腥^{なまぐさ}いが、樟の芳香はときどきその腥さを吹き払ってさわやかに流れ、とくに春の芽立ちどきなど四

方住民の心のうるおいともなっているのであった。

魚市場のなかで規模の一番大きいのは、納屋堀に面して荷揚げの便利な九反田市場だが、この市場の南隣に鬼龍院政五郎が男稼業の看板を掲げたのは大正四年春のことである。界限は皆、市場に関わった商いの家ばかり、鮮魚や海産物や、また関係者の用を満たすための雑貨、飯屋、風呂屋など軒を並べているなかに、通称鬼政の家は道を隔てて向い合った二軒がそれで、看板のある東側を主家と呼び、主家の店の間には四枚引手の龍虎の襖と、正面には大きな振子の掛時計に並んで魔除けといわれる甲冑が飾られてあり、長押には入山形に鬼の字を書いた提灯箱がずらりとかけられてある。

市場の町は、有明けどきから日が昇るまでが勝負で、この時刻にはまるで大喧嘩と紛う騒音に充たされ、その余韻は何となく昼すぎまでこの界限を包む。破れ鐘のような声で荷を揚げている男、叱咤している競り人、品を落す商人も生物を扱うだけに敏く鋭く、ここに集う男たちは皆威勢のいい度胸者ばかりだが、鬼政の家の構えはその男たちをさえ一瞬怯ませるに足るだけの無言の威力があった。というのも、高知の町で揉め事を宥める顔役というのはあちこちにあっても、それらは皆表稼業を持っており、市民は「土木のお方」とか、「金貸しのお方」とかの呼びかたで区別をつけていただけで、鬼政のように正面張って俠客業を打ち出した男は近頃初めてなのであった。

市場の行き帰り、通行人はこの家のいまどき珍しい黒い不気味な甲冑や、ものものしい名入りの提灯箱をこわごわ覗き、そして向い家に住むという鬼政の家族をそつと窺って通る。主家にはいつも鬼の字の法被を着た子分たちが立ち働いており、稀に龍虎の襖をさつと開けて鬼政が店に現われるときもあった。その面構えは、一瞥するなりどんなぼんやり者の脳裏にもかつきり灼きついてしまうほど強い印象を持つもので、そういう印象から人もは自然に「鬼政の親分さん」とこの人を呼ぶようになっていたのであった。背の丈は五尺四寸、体全体一刀の反りのように張り充ちていて、双肌を脱げば、土佐では我慢と呼ばれる彫物が背中から上膊にかけ、名に因んだ昇り龍がいちめんに彫られており、薄い脛は執拗で鋭く、何よりの特徴はその海鼠のように厚く強靱そうな両唇にある。この唇が一旦開いて大喝すれば長年傍にいる子分でさえ縮み上るといわれ、こういう面魂と地声が出来上るまでの年月は、誰にも覗かせぬ鬼政だけの胸の内に在るといわれている。

土佐に熱血の志士は出ても男稼業の俠客は育たぬといひ伝えられているように、鬼政の修行もすべて上方でなされ、納屋堀に看板を掲げたのはやっと二十八年ぶりに鬼政が故郷へ帰って来た日なのであった。もともとは地下の人間で、本名を恒吉といい、明治六年海産物商林田弥助、ときの第六子として生れ、高知市の西、漁師町の宇佐に幼年時代を送っている。

宇佐の町は丸い入江を抱いた天然の良港で、ここは高知県の海岸線一の水揚場となるため、町なかには漁師や海産物で生計を立てている人が多く、もと漁師の弥助も一荷商人いっかあきうどから身を興し、城下の納屋堀に小さな干物屋を出しているのであった。沿岸漁業の船は、それぞれさかのぼの港へ水揚げするのが普通だが、なかには浦戸湾から掘割を溯さかのぼって納屋堀の魚市場に直接揚げるのもあり、そういう関係から市場界限には宇佐出身者が多く、弥助も多分、知合いなどの手引があつてここに出たものであろう。

十人という子福者の弥助夫婦はいつも納屋堀に住み、子供らは店の手伝いが出来るようになるまでは宇佐の祖父母の許に預けられてあつた。家は町の端にあるため橋田と呼ばれる集落の、高い堤防の内側にあり、日夜波の音を聞きながら大きくなったが、この漁師町の育ちと恒吉が博徒世界へ走つたこととは何か深い関わりはなかっただろうか。凧凧ぎの日の入江の巻波は至つてやさしいが、海がしけるとたちまち変貌して波は奢り高ぶり、まるで爆薬の爆はせるような音をたてて堤防の石垣に万丈の高さで碎け散る。そのドーン、ドーンという地響きのたび、堤防際いの家の障子はこまかく震え、馴れない人間なら夜の眠りも平らでないのを、宇佐の町の生え抜きならたとえ赤ん坊でも気にせず熟睡するという。土佐の海岸沿いの町では、雨が真直に降ることは少なく、すぐ横なぐりの荒模様となり、堤防は危険にさらされるが、その雨のなかを蓑笠もつけぬ褌ひとつの男たちが土囊など運び

ながら、

「この程度の出水じゃこたえんのう」

「降るならいっそ水桶みずたじの底をぶち抜いたほど降ってもらいたいもんよ」

と白い歯を見せながら怒鳴り合うのも勇ましいもので、たとえしけで不漁になろうと決して弱みを見せぬ度胸のよさが漁師町に住む男たちの身上しんじょうでもあった。

大漁の日はまた景気がよく、舳先を連ねて戻って来る船からまだ跳ねているカツオが次々に下され、浜にずらり並べて仲買人の手に買い取られてゆくときの活気は、堤防を越えて橋田集落の隅々にまで響いて来る。高知の町で、

「宇佐の砂つきのカツオはエー、」

という呼び声は即ち浜揚げの新鮮さの代名詞となっており、ぼてふりの魚屋の商いをずい分と楽にさせているという。

弥助の子供たちは、それぞれ足がすっかりして来ると宇佐の海産物を背に負い、片道四里の道程を、途中荒倉峠を越えて納屋堀の店に届ける役を課せられていて、恒吉も十歳の頃からよく使いをさせられた。祖父が買いつけた鰹節やら雑魚干物のたぐいを風呂敷しぼらに包んで背に斜めに負い、新しい草鞋わらじを穿はいて橋田の家を朝立ちする。海沿いの道を暫く歩き、仁淀川の河口につき当ってのち少し川をさかのぼり、五厘銭払って渡し舟で弘岡村へ渡り、

その村外れから険阻な山道にかかつて頂上を越して下りれば朝倉の練兵場で、なお一里近く市街地を歩いてやっと納屋堀に着く。一人旅の日は少なく、大てい兄か弟かが一緒だったが、それは互いに長道中をいたわりあうためというより、途中の道草と悪戯わるさをくい止めるために弥助が考えた組合せでもあった。

子供のことなら、ただ真直前を向いて歩くだけではすぐ退屈し、道端の虫など追って脇道に分け入り、気がついてみれば陽が真上の頃にはとうに納屋堀についているはずが、ときには生よえん(無塩)も入れてある荷が役立たぬ時刻になり果てていることもある。遊び過ぎで腹が減れば、荷を解いて雑魚をつまんだり干物をむしたりで腹の虫をゴマ化すが、それは着いた途端すぐ弥助に見破られ、猛烈なげんこつの雨に頭が瘤だらけになることも珍しくない。弥助は、二人ならどちらか正気のあるやつが止めるじゃろ、くらいに思ったらしいが、それはちょっとした見込み違いであって、正気も嘘気も男の子二人揃えば却って倍增するのであった。

あとから思えば恒吉は、この海産物運びの使いがもとで次第に横道へ外れて行ったようなふしがあるが、もとはといえば子供の悪戯わるさ、と笑い捨てられるようなこんな行為にどうして固い芯が入ってしまったか、それには明らかに直接きっかけになったと思われる或るひとつの情景がある。その日恒吉は、兄弟全部がお兄にやん、と呼ぶ長兄との二人連れで山

越えをしていたが、峠近くなると兄の足が急に早くなり、暗い杉木立のあいだからしきりと頂上を透かしてみて、

「今日は居るか、居らんか。あ、居る居る」

といいざま急坂を駆け登り始めた。

荒倉峠の頂きは、ひと頃白昼でも強盗が出没したためかいまは立木をすべて伐り払ってあり、そのしんと明るい道の脇に小さな木箱を並べて着膨れた老婆が餅を売っているのがあった。峠の上にあるもの売りはよく草鞋の換えなども併せ売っていたから、そのための相談かと思つたが、実はそうでなく兄は、

「恒、お主の荷から削り節を出せ」

と命令し、その花節を握んでさし出しながら、

「お婆やん、これで餅三つ。ええろ？」

というと、馴れているのか老婆はゆう然と被っている手拭いをはたいてそれで受け、「機械削りのお節や、かさはあるけれど目方はほん少ないもんじゃ。これなら餅はひとつ、ひとつ」

と盆の上の大福を一つつまんで手渡した。

兄はそれをすぐ自分の口に押込み、あと二つを貰うためさらに弟の荷のなかの削り節を

ごっそり擱んで老婆に渡したが、そのあと餅のひとつを恒吉に分けながら、

「親父にいうなよ。いうたら許さんぞ」

ときつい目で凄^{すこ}んで見せた。

この頃宇佐——高知間半日の道程に弁当を持って出るような人はあまりなかったし、このときも先廻りして兄が謝っていてくれれば、この情景は恒吉の心の内で暗く経^へ巡^{めぐ}ることはなかったかも知れなかった。が、いい合せ通り二人とも素知らぬ顔をしたために、仕切書と目方とを必ず較べる弥助にたちまち暴かれ、

「恒、これほど足らんとはどういうこっちゃ。自分で食うにしちや余計すぎる。転んで道へでもふり撒いたか」

と恒吉はさんざんに小突かれたが断じてしゃべらず、一方兄の荷は無疵^{むきず}だったためにこちらは全く不問に付され、恒吉は最高の懲罰として晩飯抜きを申し渡されてしまった。食べ盛りの子にはいちばん辛い飯抜きで店番をさせられたとき、恒吉は、弟のために一言の弁明もせず親父と一緒に食膳に坐る兄を見て、自分がこの兄のため見事毘^はに嵌められたのを知った。多分兄は、まだ知恵の廻らぬ弟たちを次々この手で嵌めては餅を手に入れていると思われ、恒吉より下の弟たちは餅の分け前に与るところか、兄に荷は出さされ、親父には鉄拳を食らっていつもそのまま泣き寝入りしていたのではなかったろうか。この頃は

どの家でも長男は特別に育てられ、林田の家でも兄弟は皆「お兄やん天皇、俺らは乞食」などと陰ではいつていたが、この不公平を思うにつれ、あのときの、餅の粉を白く口の廻りにくっつけながら唇を動かしていた兄の顔が必ず恒吉の頭に口惜しく蘇^{よみがえ}って来るのであった。

まだ十二、三の恒吉が、親の目を掠^{かす}めて店の鯉^{こひ}節まで持出すようになったのは、この件のあとまもなくではなかったろうか。それまでは、峠の餅売りは小遣いを持たぬ子には無縁のものだとぐっとこらえていたものが、この世に物々交換という便利な方法があることを知ってからは食べ物はおろか、欲しい物は大てい身近にあると思えるようになった。黴^{かび}つきの本節や照りのよい亀節は、雑魚や削り節の一つまみどころではなく値も張るため、懐にそいつを突っ張らせては目的の店に走り、交換を強要する。まだ子供のこの行為はよく目立ち、物売りのほうから驚いて弥助に告げたり、現場をみつけれられたり、そのたびに凄まじい怒声と鉄拳とそれ以上の制裁も加えられるが、恒吉は一向に怯まず、そのうち弥助も、

「出て失^うしより、この手^てん黒者が。こんな子はうちには要らん」

とほん気で怒鳴るようになり、親兄弟の縁は次第に薄れて宇佐、高知間をいく年か乞食同様で彷徨^{ほうこう}したあととうとう十五の春、上方へ出奔^{しゅっほん}した。

のちに親戚一統は、林田の家から高知一の俠客が出たことに就て、七分の恥と三分の誇らしさを混えながら、

「あれ一人種変りでして、」

などと世間の前を繕っていたが、恒吉の、和よりも乱を好む鬪諍とうじょうの性格は、やはり漁師たる父祖の血を真直に受け継いだものとはいえなかっただろうか。

恒吉が家を出るとき、店の売上げをくすねた十錢玉三つしか懷中してはおらず、恒吉は生涯折に触れ、

「俺が親から分けて貰うた身代は、ただの三十錢だけじゃった」

と公言して憚はばらなかつたが、どくれ者と嫌われ、たわけものと爪弾つまはじきされた少年には誰

一人路銀を恵んでくれる者もなかったことであろう。このとき恒吉がどんな志を立ててい

たか、僅か三十錢の金でどうやって上方まで辿たどりついたか、という疑問に就ては、その後

恒吉が四十三歳で納屋堀に舞い戻るまでの空白の二十八年とともに、詳細は皆目不明なのである。戻つて来た恒吉の鬼政は、口より手が早い、といわれるだけ無口だったし、殊に

愚痴うっぽい苦勞話を忌む人だったから、誰もその間の暮しぶりを窺い知ることは出来なかつた。

二十八年という長い月日のあいだ、恒吉は便りの一本寄越さず、生死さえ判らなかつたが、明治の末年になって、本町筋に出来た百貨商店まからず屋へ上方から荷を卸しに

来る商人の口からそれらしい消息が知れ、それはこの渡り者の商人たちが既にして、「松島の親分さん」と呼ぶほど、大阪の松島遊廓一帯を取りしきる貫禄を示している、恒吉の変貌した姿であった。

その頃弥助はもう亡くなり、兄弟散り散りで、納屋堀の家のことには老母とともに、嫁かず後家の姉加世が仕立物など請負いながら細々住んでいたが、加世はあの大正四年の春の日の、弟恒吉と再会した驚きを実に鮮やかに記憶に止どめている。その前年、高知城の昼のドンが始まり、その日もドンの音に樟の落葉がしばらくハラハラと散ったあと、土間に訪う声があつて出てみると、それは紛うかたなき弟の恒吉であつた。背丈は出奔当時より少し伸びて全体にでっぷりと肉が付いているものの、蝮のようなその眼光の鋭さは恒吉時代にはなかったもので、小さいときから荒い漁師を見馴れているはずの加世でさえ、すつと背筋の寒くなるような感じがあつた。それでも姉弟の懐しさで、

「まあお前、恒やないかね。今までどこで何しよつた？　いつ戻つた？」
と畳みかけて聞くのへ、

「姉やんよ、恒、恒、と心安う呼ぶのは今日限りで止めてもらおう。儂ももう昔の恒吉じゃないことを知って貰わんと困る」

ときっぱりいい渡され、加世はすっかり勝手が狂つてぽかんと唇を開けたまま、そうい